

## 地域情報（県別）

### 【鳥取】内覧会に住民ら130組「幅広い診療で地域の期待に応えたい」-岡田智之・こおげ駅前クリニック院長に聞く◆Vol.2

内視鏡検査にAI活用、予防接種と健診を開始

2025年9月17日(水)配信 m3.com地域版

2025年7月、診療所が相次いで閉院した八頭町郡家地区に開院した「こおげ駅前クリニック」。事前に開かれた住民向けの内覧会には130組もの来場があり、岡田智之院長は「地域の期待を感じた」と話す。自身の専門である消化器内科ではAIを活用した胃と大腸の内視鏡検査を行い、全身を診るかかりつけ医としての機能を高めようと院内にはCTも備える。「ちょっとしたことでも気軽に話せる相談所になりたい」。クリニックの特徴と展望を聞いた。

（2025年8月19日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



岡田智之氏（クリニックホームページから引用）

## 町長が「ぜひ会いたい」、県と町が開業費の2割を補助

——岡田先生は鳥取県の制度を活用してクリニックを開院しました。これは、県が医師の確保に取り組む市町村などを支援しようと2024年度に創設し、診療所の建設費や設備費を補助するもの。今回が初の事例だといいます。

先ほど話したように、八頭町に住む患者さんから郡家地区にあった診療所が2つ閉院したことを聞いた私は、町内での開業を考えました。そこで、融資を受けたり建物を造ったりするために銀行や建設会社の方と打ち合わせを始めました。町とつながりができたのは、建設会社の担当者が役場の職員と知り合いだったことがきっかけです。職員を通じて私が開業を検討していることを知った吉田英人町長が「ぜひ会いたい」とおっしゃってくださりました。2024年の冬に吉田町長とお会いし、開業を歓迎していただいていることや県の制度のことを知りました。

八頭町では住民の方々が診療所の開設やかかりつけ医の確保を求める請願を町の議会に提出するなどしており、吉田町長をはじめ町では郡家地区の医療環境に問題意識を持っていたのだと思います。制度を活用することで、県と町から開業にかかる費用の2割ほどを補助していただきました。

## 住居風クリニックで「来やすい雰囲気づくりを」

——町や住民からすると、待望のクリニック開設だと思えます。開院前の内覧会には住民も訪れたそうですが、その際に交流もされたのでしょうか。

開院したのが7月31日で、7月26日の土曜日に行政がテープカットをはじめとした記念のセレモニーを開いてくださり、翌日の日曜日に住民向けの内覧会を開催しました。内覧会には町内に住む方を中心におよそ130組に来ていただきました。来場者の多さに驚いたほか、住民の方々との交流でも良い刺激を受けました。「近くにクリニックができて良かった」「これから通いますね」などといった地域の生の声を聞いたのは本当にうれしかったですね。

こうした行政・住民の方との触れ合いを通して、かかりつけ医として期待されていることを肌身に感じました。幅広くさまざまな疾患を診ていき、ちょっとした困りごとでも気軽に話せる「町の相談所」のような存在に成長していきたいと改めて思いました。

——そんな思いがある中、実際にクリニックを造るにあたりどんなことを工夫されましたか。現在の人的体制も教えてください。

地域の方が来やすい雰囲気づくりを心がけました。患者さんからすると医療機関は緊張しやすい場所だと思うので、外装をダークブラウンにして内装にも木をふんだんに取り入れ、家に近い空間を目指しました。また、私の専門性を考慮した設計も工夫した点です。私は勤務医時代、消化器内科医として胃と大腸の内視鏡検査を行ってきたので、クリニックでも同様の検査を行っています。そこで、検査を受ける患者さんがリラックスしやすいよう院内に専用の個室を造りました。大腸の内視鏡検査では事前に下剤を飲んでいただくため、人によっては院内でトイレに行く回数が増えます。個室にはトイレやテレビを備えているので、検査前後に落ち着いて過ごしやすいのではないのでしょうか。

クリニックの現在の人的体制は医師1人、看護師4人、医療事務3人の計8人です。医療事務の1人を除いて常勤です。内視鏡検査では患者さんへの説明やサポートのために人手を要するので、看護師を多めに雇用しています。

## AIが病変の可能性のある部分を検出、視覚と音声で通知

——内視鏡検査ではAIを活用したシステムを導入しており、院内にはCTも備えます。いずれも、地方の内科系クリニックの設備としては特徴になるかと思えます。

AIを活用した内視鏡のシステムは、富士フイルムが提供する診断支援システム「CAD EYE」です。同社が保有する臨床データを基にAI技術のディープラーニングを活用して開発されたもので、検査中に病変の可能性のある部分をシステムが検知して画面に表示し、音声でも知らせてくれます。私は長く内視鏡検査を行ってきましたが、100パーセント見落としがないわけではないので、診断の精度を上げるために活用しています。補助的ではありますが、検査のダブルチェックや診断のサポートを担ってくれる有用なシステムだと感じています。周辺のクリニックではまだあまり導入されていないようです。

一方のCTは、幅広く診るかかりつけ医の機能を高めるために導入しました。CTがあれば肺炎などを含めて全身をチェックできて診断力が高まりますし、患者さんを紹介する際もCT画像があれば病院の先生が診断・治療を検討する際に参考になりやすいと思います。

——開院してまだ1カ月未満ですが、開業医として感じている課題はありますか。

先に挙げた地域医療研修の際にも思ったことですが、幅広く診ていくために対応力を磨く必要があると考えています。町内には10ほどの診療所がありますが内科がメインであり、皮膚科や眼科、耳鼻咽喉科などはありません。もちろん、専門的な診断や治療は病院にお願いするとして、内科と消化器内科以外の領域でも、身近な症状やお悩みについては相応の診療ができるようにしていきたいです。その上で、自分が勉強するだけでは限界があるので、発展しているAIの補助診断を内視鏡検査以外でも活用し、診療をサポートしてくれるシステムをつくっていきたいです。

## 「在宅医療にもチャレンジしたい」

——最後に、クリニックの展望と読者へのメッセージをお聞かせください。

将来的には予防医療にも力を入れて、住民の方々への情報発信も行うことで地域の健康寿命延伸に貢献したいと考えています。予防接種と健康診断を2025年9月から行う予定で、他にもできることを一つ一つ行っていければ。地域の健康教室や講演会などに参加して、医療や健康に関するお話をさせていただく機会も得られるとうれしいですね。地域医療研修で魅力を感じた在宅医療もニーズがあると思うので、人員体制を整えばチャレンジしたいです。

町のクリニックでは専門的な検査や治療ができないことがあるので、大きな病院との連携は欠かせません。周辺の先生方には患者さんの診療をお願いする機会が多いと思いますが、ご協力いただくと幸いです。逆に、病院での急性期医療が終わって継続的に診療が必要な場合は喜んで対応させていただきますので、お気軽にご紹介ください。

◆岡田 智之（おかだ・ともゆき）氏

2013年鳥取大学医学部卒。津山中央病院での初期研修後、鳥取赤十字病院や鳥取大学医学部附属病院第二内科、鳥取県立中央病院に勤務。2025年7月、「こおげ駅前クリニック」を開院。日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

